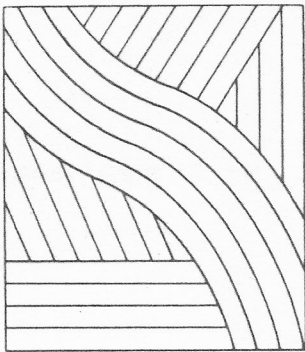


年報  
2023

38



川端文学の

視界

川端康成  
学会編

## イタリアは川端康成文学を読む

### —イタリアでの作家たちの『眠れる美女』への憧れ

ジヨルジヨ・アマトラーノ

一九五九年に始まった川端康成の作品の出版は、イタリアにおける日本文学の翻訳史において重要な一章を記している。一九世紀末にイタリア語に翻訳され始めたそれ以前の日本文学は、学者や知識人を中心とした少数の読者のみにしか知られておらず、そして翻訳された作品のほとんどは古典文学だった。最初に出版された川端の小説は、エドワード・サイデンステッカーによる英語の翻訳に基づいた『雪国』だった。それから遡ること数年前の一九五一年のヴェネツィア国際映画祭で『羅生門』が上映されたことにより、日本映画が発見されたばかりのイタリアでは、現代文学はまだ未開拓の世界だった。そこまで、専門的雑誌に掲載された、いくつかの短編小説と大岡昇平の『野火』を除けば、日本近現代文学はほとんど出版されていなかった。『雪国』の出版により、ま

さに『羅生門』で日本映画への覚醒が起こった時のように、高度に発達した文化的表現の一つとして、日本文学が認識されたのである。突然、たった一冊の小説のおかげで、日本文学は最も偉大な文学の一つとして世界的に偉大な権威を持ち自らを主張するようになる。イタリアの出版界は失われた時間を取り戻す必要性を感じており、矢継ぎ早にいくつかの日本の小説が出版されているが、そのほとんどは英語かフランス語から翻訳されていた。大幸や芥川などの作品も登場するのだが、主流は川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫の三人組だった。

一方、『雪国』の好評にもかかわらず、不思議なことに五年間の中断があり、その後一九六五年に、ようやく『千羽鶴』と須賀敦子編の有名なアンソロジーである『日本現代文学選』[Narratori giapponesi moderni]に挿入さ

れた「ほくろの手紙」がほぼ同時期に出版された<sup>(1)</sup>。その後、次々と『古都』、『山の音』と『眠れる美女』が出版された。イタリアの出版社が日本文学の作品を英語とフランス語からの重訳で出版する傾向があるのは対照的に、川端康成の作品は、『雪国』の重訳以降、常に原文から翻訳されてきたという幸運に恵まれている。『雪国』以降の川端作品を最初に翻訳したのは、マリオ・テティと須賀敦子であり、いずれも原作の雰囲気伝える繊細さを兼ね備えたイタリア語の文体の美しさが高く評価された。川端の作品は引き続き翻訳されており、「たんぽぽ」や「少年」のようなマイナーと言えらるであろう作品まで、最近イタリアで出版された。私自身、あまり有名ではない『富士の初雪』という短編小説集と川端がホノルルで行った二つの講義のテキストである『美の存在と発見』を訳してきた。それ以外にもイタリアではノーベル文学賞授賞式でのスピーチの『美しい日本の私』、『純粋の声』、『美しさと哀しみと』、『みづうみ』、『浅草紅団』、『掌の小説』、『狂った一頁』、『伊豆の踊子』、『水晶幻想』などが翻訳出版されている。そして、ようやく『雪国』も原文から、私の翻訳で出版された。

『眠れる美女』がイタリアで出版されたのは川端康成の死の直前である一九七二年のことだった。英語からの重訳ではなく、原文からの翻訳だったにもかかわらず、モンダトーリ出版社は『The House of Sleeping Beauties』という英語版のタイトルを真似して、『La casa delle belle addormentate』、つまり「眠れる美女たちの家」として出版したのである。その時期、既にノーベル賞の受賞もあり、イタリアでの彼の評判は確立されていた。「禽獣」と「片腕」という小品、及び三島由紀夫の解説も収録され、熱烈な批評がいくつもの新聞と雑誌で展開されたし、読者の反応もすこぶる良好で、前作以上に衝撃を与えたようだった。そのような強い印象を与えた要因は、小説に存在する瞑想的な官能性だった。それはイタリアの文化的伝統におけるエロティシズムの表現とはまったく異質のものだった。それに加えて、これは私の考えだが、エロティシズムと老年期の相関関係に触れるという当時のイタリアではタブー視されていた内容も、大きな反響を呼び起こした理由だと考えている。実際に、この点について我が国で議論と研究の対象となったのはごく最近のことであり、七〇年代初頭のイタリアでは完全に

イタリア人は川端康成文学を読む—イタリアの作家たちの『眠れる美女』への憧れ

無視され、取り除かれた次元のテーマだった。また、吉村公三郎監督、新藤兼人脚本の『眠れる美女』を題材にした映画がイタリアで配給されたこともあり、江口と眠れる娘たちの物語は人々に強い影響を与えた。

この小説の最も著名な愛好家の一人が、作家のゴッフレッド・パリーゼだった。パリーゼは日本文学の熱心な読者だったが、『眠れる美女』に特別な興味を持っており、実際にその本を片手に日本へ旅行することに固執し、それを実現した。日本への旅行中、彼は鎌倉の川端の家を訪れ、川端の妻との面会を果たしている。パリーゼは、川端夫人との出会いを、彼の書いた日本についての随筆の中で語っている<sup>(2)</sup>。日本からイタリアに帰った後、モンダトーリ出版社に、彼の一番好きな、メドウーサ *Medusa* というシリーズで『眠れる美女』を、彼自身の解説付きで、再版するように執拗に掛け合い、なんとか出版社を説得した。この解説のなかで、パリーゼは川端を「これまで存在した中で最も偉大な老年と死の詩人」と定義し、『眠れる美女』を「これまでにかかれた唯一の老年期の真の傑作」と定義している。川端の顔については、*una sensualità tragica e potente* 「迫力がある、悲劇

的な官能性が明らかに見える」と書いている。「彼の小説でも読める官能性は肉体的ではなく、精神的で知的な官能性だったのだ。」<sup>(3)</sup>

この解説でパリーゼは、川端と『眠れる美女』に明確かつ直接的に敬意を表したのだが、この小説と彼の関係の深さを、別な形でも、間接的に表現している。それは没後出版された小説である『血の匂い』[*L'odore del sangue*]と、『シラバリー』[*Sillabari*]という短編小説集の中の「家族」という短編である。長編小説の中の血の匂いと、短編小説の中の母乳の匂いの描写は、両方ともとても詳細で同時に非常に似通っており、またどちらも『眠れる美女』を連想させるのだ。その文章の内容だけでなく、パリーゼに「血」と「母乳」という発想を暗示したのは、『眠れる美女』にある血と母乳の対であったことに疑いはない。

私が今参考しているのは、むかしの恋人の乳首の血の思い出の影響で、隣に横たわる娘の乳の匂いをかぐシーンである。

パリーゼによると、『眠れる美女』は老年期の小説であるため、「若者には理解できない」。「少なくとも少少年を

とっていなければ、その深淵な美しさを理解することは不可能です。四〇以降の読書だといふと思う。」とある<sup>(4)</sup>。しかし、私の経験は、パリーゼの考え方を明確に否定している。私の日本文学の授業では、男女を問わず学生たちがこの小説に非常に惹かれ、それを洞察に満ちたコメントで分析することもある。彼らの人生経験からはかけ離れていても、感情的には非常に近く感じているのだろう。したがって、若者に理解できないことはないだろう。むしろ、見ることでできないほど遠い地平の彼方にあるこの物語を彼らが理解できるのは、『眠れる美女』の持つ普遍性の一つの証拠ではないかと、私は思う。

他のイタリアの作家や評論家も、『眠れる美女』について記事や批評を書いたが、ボローニャ大学の記号論の教授であるマリア・ピア・ポツァートによる興味深い研究に言及したい。ウンベルト・エーコの弟子であり、かつ長い間アシスタントであったポツァートは、やはり記号論的な観点から小説を分析した。二〇二〇年に出版された彼女の論文のタイトルは『眠れる美女』論。限界と情熱的なテイスクリルの母型としての身体」である。要約し難い論文なので、ポツァートが小説の空間にお

ける主人公の江口と少女たちの位置を効果的に総括しているポイントに言及することに限定する。

「記号論的に言えば、娘たちと老齡の客たちは、生と死の狭間の二つの異なる中間段階にあると言える。」<sup>(5)</sup>つまり、ポツァートはその中間段階に「非生」と「非死」という名称を付ける。

この「中間段階」の定義は、吉本ばななの『白河夜船』の物語構造を私に思い出させた。もちろん吉本ばななは川端康成とは別な世界に属しているのだが、この小説には川端の影響が感じられているのだ。

主人公の寺子の、自殺した友人しおりの死を悼むことの難しさを物語っている。しおりの仕事は、寝ているお客さんに添い寝することだった。ナレーターは寺子は、妻が深い昏睡状態にある男性と浮気をしている。吉本に描かれている状況は、『眠れる美女』で描かれている環境の鏡面表現である。『眠れる美女』では客は眠っている娘たちと夜を過ごすのだが、『白河夜船』ではしおりという娘は眠っている客と添い寝をする。吉本はあとがきで本書のテーマを次のように要約している。

この三つの物語は、ある閉塞した状態、時間の流れ

が停止した期間の中にいる人達の、「夜」を描いたものばかりです。(6)

川端の小説と吉本の小説との類似点に興味を惹かれて、イタリア人作家・演出家であるカテリア・イッパソンが『*Io è il mio*』(「人形は私のもの」という劇的なモノローグを書いたこと)によって注目された『眠れる美女』と『白河夜船』に触発されたこのモノローグは、二〇〇〇年に初めて上演され、その後も数回再演された。そして二〇一七年にはフランス語版がパリでも上演されていたのである。

イタリアでの『眠れる美女』に関する議論には、ラテンアメリカの作家による二つの作品も大きく貢献している。一つはマリオ・バルガス・ジュサの『嘘から出たまこと』(『*La verdad de las mentiras*』)に収録されている『眠れる美女』についてのエッセイであり、もう一つはガブリエル・ガルシア・マルケスの『我が悲しき娼婦たちの思い出』(『*Memoria de mis putas tristes*』)である。

バルガス・ジュサのエッセイは、パリーゼのエッセイと共通しており、エロティシズムと死という対の組み合わせを強調している。フロイトが『快樂原則の彼岸』

で分析した、エロスとタナトスは、西洋文学の伝統の多くを伝えており、すでに聖書やダンテの『神曲』にもその例が見られ、この二つは現代文学にも広く表れている。しかし、バルガス・ジュサは、パリーゼと同様、愛と死を扱う方法に日本人ならではの特異性があると考えており、川端がそれを文学という手段を用いて非常に効果的に表現したと信じている。バルガス・ジュサによると、「この不思議な魅力に溢れた小説ほど、死や破壊の衝動と性欲が分かちがたく結びついた深層領域を見事に描き出した作品は少ない。」(7)

ガルシア・マルケスの小説に関して、当時イタリアで出版された批評のほとんどは、『眠れる美女』と『我が悲しき娼婦たちの思い出』の類似性を強調していた。それは、ガルシア・マルケス自身、小説の題辞として『眠れる美女』の最初の引用を置いたので、明らかにその小説の『眠れる美女』との関係を宣言していた。

『眠れる美女』が出版されてから約三〇年後、ガルシア・マルケスの小説を論じる際の主要な参考資料が『眠れる美女』であり、川端の没後五〇年を経た現在も、この小説がずっと再版され、読者に読まれ続けていることは、

老いと死を語るこの小説の、並外れた長寿と若さを示しているであろう。

しかし、イタリアでは『山の音』も愛好者があるのだ。たとえば著名な批評家のピエール・ヴインチエンツォ・メンガルドは『個人的なアンソロジ』、つまりメンガルド自身が懂れている詩人と作家の詩や文を選び集めた本で、『山の音』からの一章とそれについての自分の解説を挿入した。

メンガルドによると『山の音』は「日常生活を描いているにしても、その日常の中に隠れている意味深い、奇跡的な現象も表す。川端はさまざまなエピソードを述べるのだが、みな断片的だから、読者は最初まとまりのない物語に思ってしまうかもしれないが、徐々に全てのエピソードを、連想や予想や暗示でつないでいく構造が現れてくる。その上、川端の優れた筆触も忘れざるものである。」(8)

私の知っている限り、日本文学を愛したイタロ・カルヴァーノは川端について文書を書かなかつた。しかし、『冬の夜ひとりの旅人が』(『*Se una notte d'inverno un viaggiatore*』)という小説に日本文学のパロディを挿入

した。不思議なことは、そのパロディを描くために川端と谷崎の小説からさまざまな要素を抜粋し、それに別な形を与え、模造の小説を作ったのだ。川端と谷崎の文体は異なっているのにカルヴァーノはうまくアサンブラージュができたのは認めざるをえないが、それは深さがない、ただのポストモダン的な遊びである。

カルヴァーノより、批評家ピエトロ・シタテイの川端作品への関心は注目に値するものである。川端作品について、シタテイはこう書いている。

全てはエロスの香りがする。そしてエロスは全ての感覚、つまり眺め、音、香り、色などに変化する。希薄で軽やかなさまざまな感覚が交錯する。川端は時々ストーリーを伝え忘れることさえある。彼は、宇宙の偉大な類似物、つまり私たちを救い、私たちを閉じ込める非常に繊細で緻密な織物を見たり、聞いたり、嗅いだり、触れたりすることにだけ関心を持っている。(9)

ピエトロ・シタテイも、これまで私が言及してきた作家と評論家同様に、おそらく普通のイタリア人の読者同様に、川端作品の中で一番感心するのは文体の非常に細か



い美しきや繊細な自然の描き方やエロスとタナトスの、他に類を見えない表現である。そういう川端の特徴は、イタリア文学にあまり見当たらない性質なので、イタリアで川端を読むと、イタリア文学に欠けるものを発見できるかもしれない。結局のところは、高度な文学を読むと、自分の存在の空っぽの部分を満たすような微妙な楽しみを味わえる。そういう時、文学の読書という行動は、実存的な完成の経験に近づくことになるのであろう。

注

- (1) Atsuko Ricca Suga (a cura di), *Narratori giapponesi moderni*, Milano, Bompiani, 1965.  
須賀敦子編『須賀敦子が選んだ日本の名作—六〇年代—』(河出文庫 110110年)
- (2) Goffredo Parise, *L'eleganza è frigida*, Milano, Mondadori, 1982.
- (3) (4) Goffredo Parise, "Postfazione", in Kawabata Yasunari, *La casa delle belle addormentate*, Milano, Mondadori, 1982.
- (5) Maria Pia Pozzato, "La casa delle belle addormentate. Il corpo come limite e come

matrice del discorso passionale", *Rivista italiana di filosofia del linguaggio*, doi: 10.4396/SFL2019EC9.

- (6) 吉本ばなな『日河夜船』(福武書店 一九八九年)
- (7) マリオ・バルガス・ジュサ『嘘から出たまじ』(現代企画室 110110年)
- (8) Pier Vincenzo Mengaldo, *Antologia personale*, Torino, Bollati Boringhieri, 1995.
- (9) Pietro Citati, "Kawabata: L'ultimo segreto dell'eros", *La Repubblica*, 21 gennaio 2008.